朝日講座

連続講座 1

2016年8月6日（土）13:30〜
愛知県陶磁美術館本館講堂
埋蔵文化財展「弥生への旅　朝日遺跡」

朝日遺跡の“日常と非日常”

石黒立人
（愛知県埋蔵文化財センター専門委員）

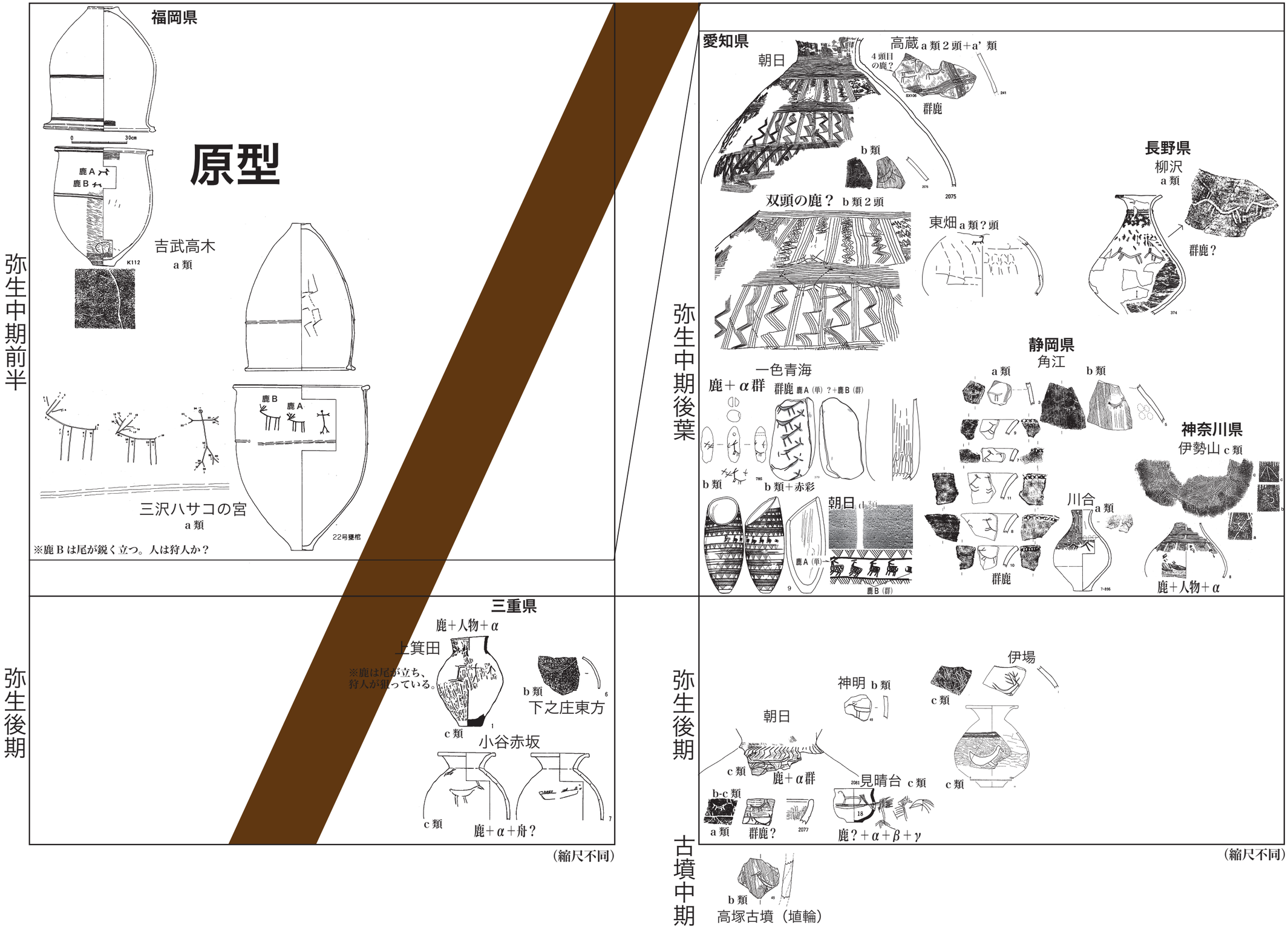
キーワード：「ハレ」と「ケ」、環濠（壕）と墓域、大形建物と井戸

1. まず、《日常と非日常》を考える
①「ハレ」と「ケ」
（ア）日常を「ケ」の日、祭礼や年中行事などを行う日を「ハレ」の日と呼ぶ、とする。
（イ）「ハレ」と「ケ」は一対。
（ウ）「ハレ」と「ケ」は時間的な区分として配置され、a：同じ場所（空間）で交代することもあれば、b：異なる場所（空間の区分）を必要とすることもある。
②社会にとっての《日常と非日常》
（ア）「ハレ」と「ケ」の繰り返しも暦にそって予定通りの安定したリズムを刻むのであれば大きくは《日常》的と言える。
（イ）自然環境の変化は、たとえそれが洪水であっても、ナイル川のように予定調和的に生活に折り込み済みであれば《日常》的な出来事の一つに過ぎない。しかし、それが全く予期せざる大災害となれば、社会生活に深刻な打撃を与える《非日常》的な出来事となる。
（ウ）ヨーロッパや日本の中世（戦国）では戦いが頻発して《日常》的な環境となっていたために、かえって平和な期間が《非日常》的ともいえる状況があった。
2. 朝日遺跡の《日常と非日常》
①環濠（壕）と墓域②喪葬の風景③大形建物と井戸④壺に描かれた双頭の鹿⑤大形建物と井戸

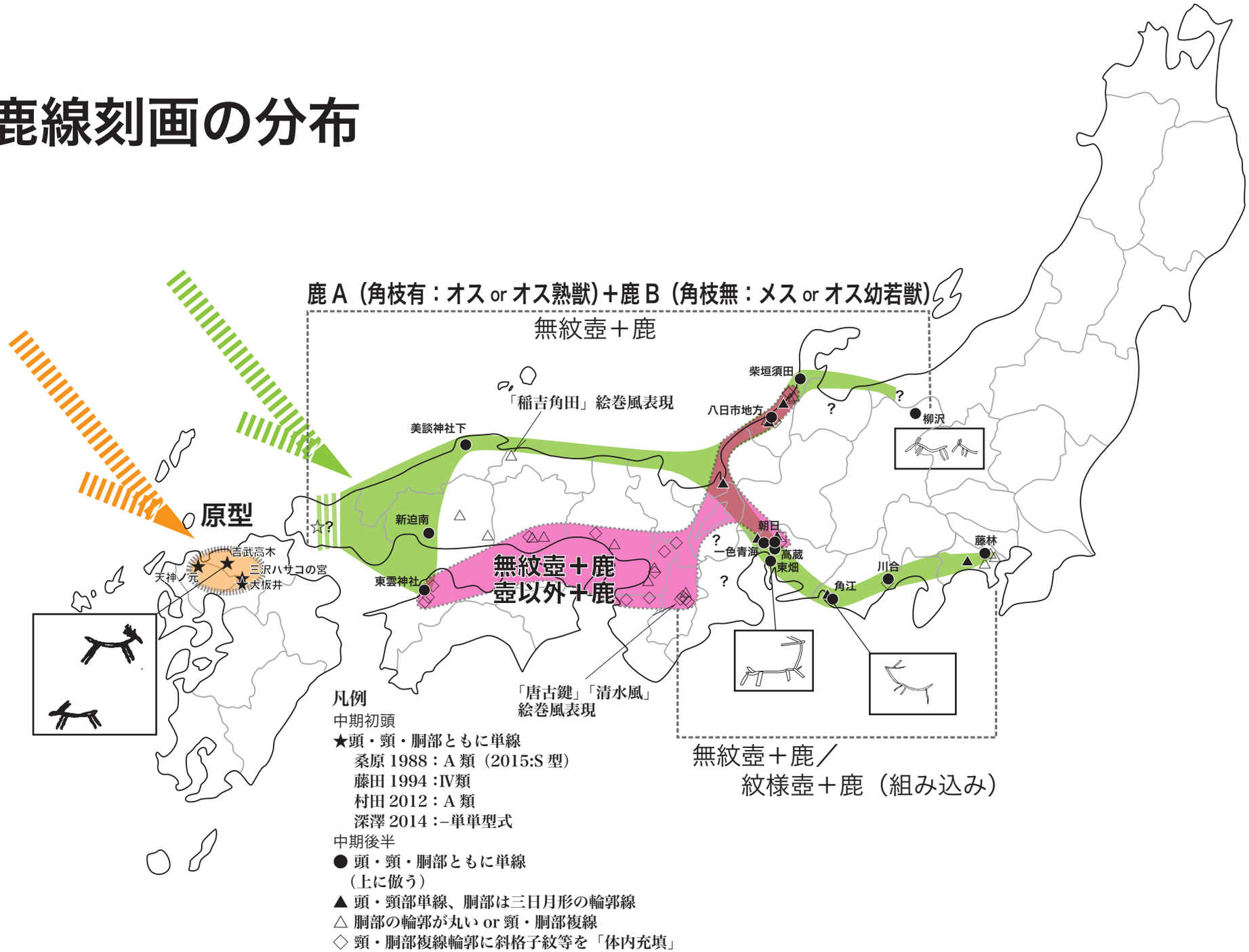
次回は8月13日（土）「朝日遺跡と色使い」堀木真美子・宮腰健司

お問い合わせ先
公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017　愛知県弥富市前ケ須町野方 802-24
Tel. 0567-67-4163　Fax.0567-67-3054
http://www.maibun.com/top/

鹿線刻画の変遷

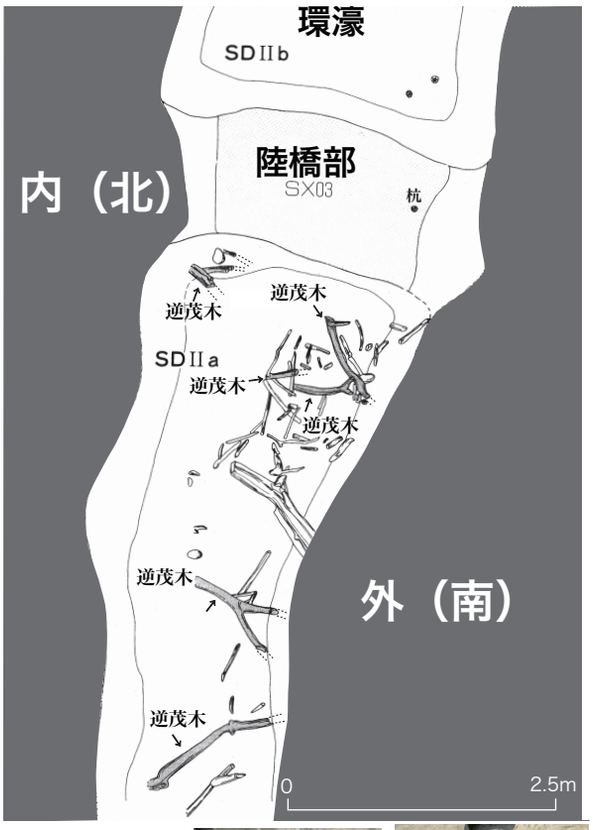

弥生中期前半
福岡県
原型
吉武高木
a類
鹿A
鹿B
三沢ハサコの宮
a類
鹿B
鹿A
22号甕棺
※鹿Bは尾が鋭く立つ。人は狩人か？
弥生中期後葉
愛知県
朝日
高蔵 a類2頭＋a’類
4頭目の鹿？
群鹿
b類
双頭の鹿？ b類2頭
東畑 a類？頭
長野県
柳沢
a類
群鹿？
一色青海
鹿＋α群
群鹿 鹿A（単）？＋鹿B（群）
b類
b類＋赤彩
朝日 b類
鹿A（単）
鹿B（群）
静岡県
角江
a類
b類
川合 a類
群鹿
神奈川県
伊勢山 c類
鹿＋人物＋α
弥生後期
三重県
鹿＋人物＋α
上箕田
※鹿は尾が立ち、狩人が狙っている。
c類
b類
下之庄東方
小谷赤坂
c類
鹿＋α＋舟？
弥生後期
古墳中期
伊場
神明 b類
c類
朝日
c類
鹿＋α群
見晴台 c類
c類
b-c類
a類
群鹿？
鹿？＋α＋β＋γ
b類
高塚古墳（埴輪）
（縮尺不同）
（縮尺不同）

鹿線刻画の分布


鹿 A（角枝有：オス or オス熟獣）＋鹿 B（角枝無：メス or オス幼若獣）
無紋壺＋鹿
「稲吉角田」絵巻風表現
美談神社下
新迫南
☆?
東雲神社
無紋壺＋鹿
壺以外＋鹿
「唐古鍵」「清水風」
絵巻風表現
柴垣須田
八日市地方
柳沢
朝日
一色青海
高蔵
東畑
角江
川合
藤林
原型
吉武高木
三沢ハサコの宮
天神ノ元
犬板井
無紋壺＋鹿／
紋様壺＋鹿（組み込み）
凡例
中期初頭
★頭・頸・胴部ともに単線
桑原 1988：A 類（2015:S 型）
藤田 1994 :Ⅳ類
村田 2012：A 類
深澤 2014 :–単単型式
中期後半
● 頭・頸・胴部ともに単線
（上に倣う）
▲ 頭・頸部単線、胴部は三日月形の輪郭線
△ 胴部の輪郭が丸い or 頸・胴部複線
◇ 頸・胴部複線輪郭に斜格子紋等を「体内充填」

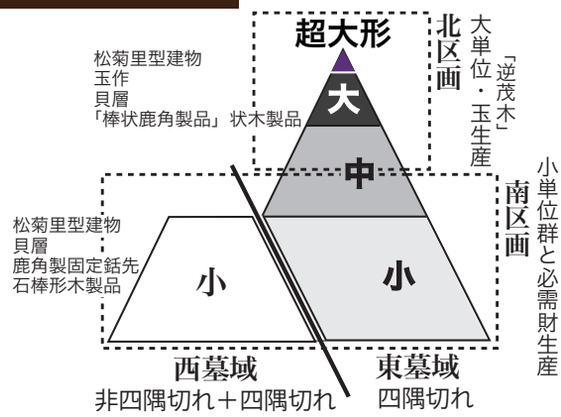
初めの「逆茂木」と終わりの「逆茂木」

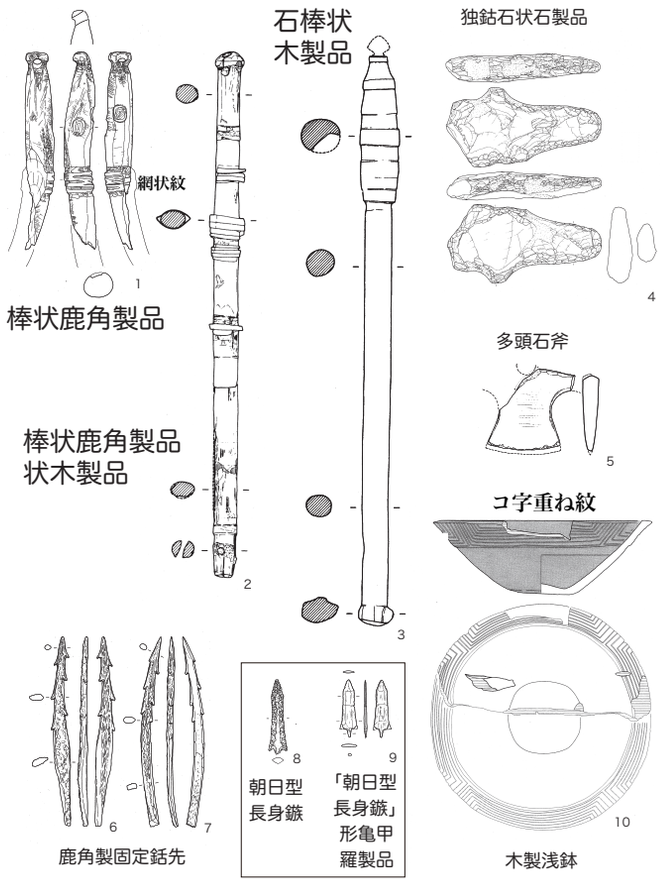
中期前葉「逆茂木」



中期後葉「逆茂木」

朝日遺跡の構造



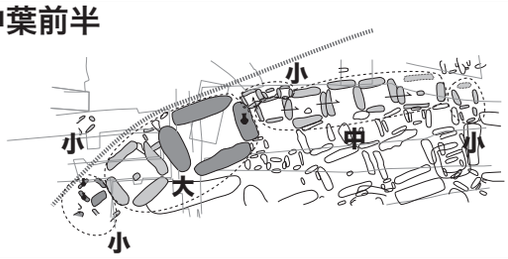


東墓域の変遷

中期前葉

極大形を含む各規模の混在

中期中葉前半

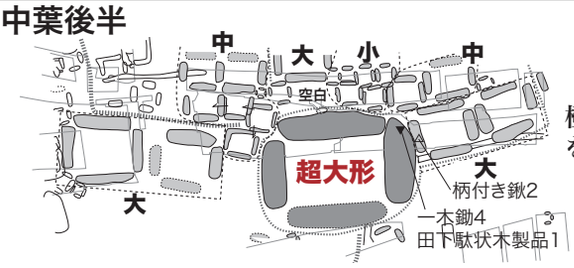


大形上位を核とする整列

出土土器無し、時期推定

出土土器から時期判定

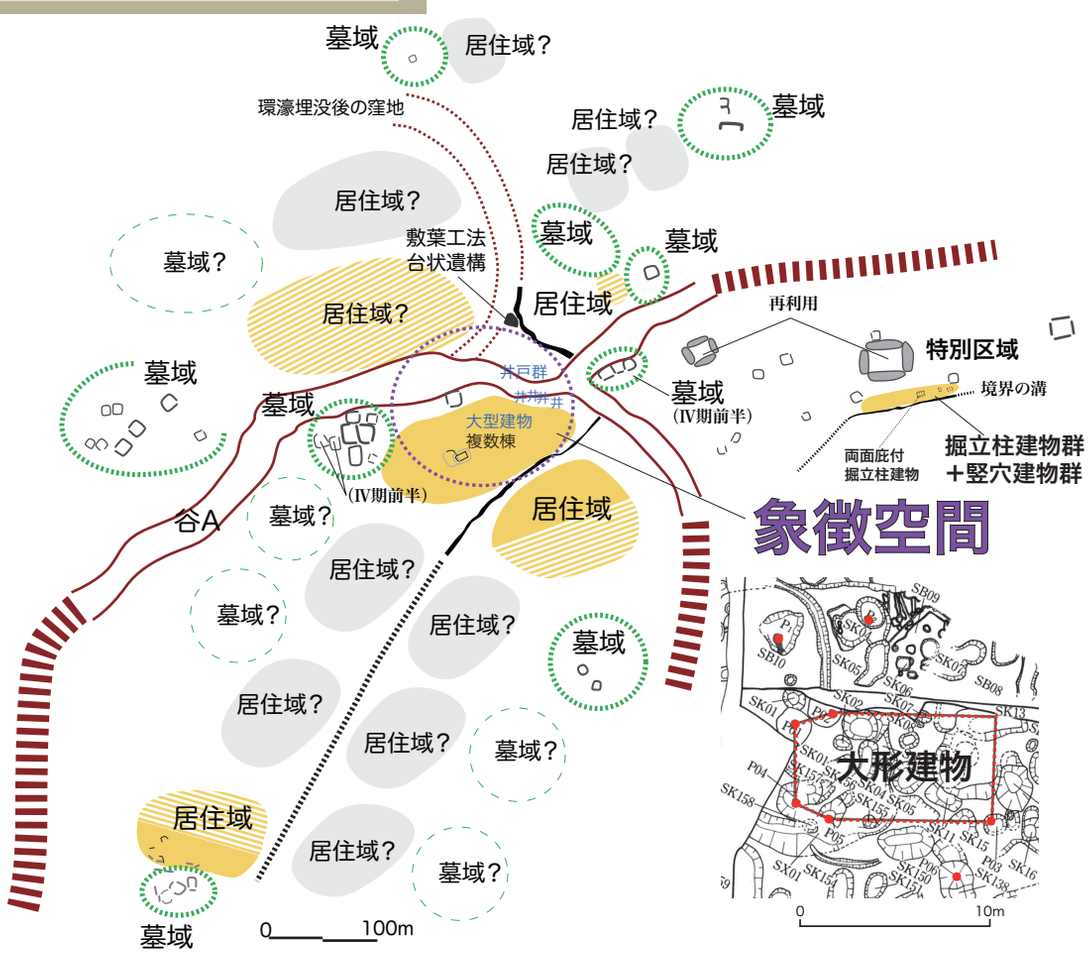
中期中葉後半



極大形、大形、中小形の規則性をもった配置

玉作関係遺物分布
中期前葉～中期中葉前半

中期後葉（BC2～1世紀）
＜居住域＋墓域＞が複数単位並存



《日常と非日常》の朝日遺跡

1.まず、《日常と非日常》を考える

①「ハレ」と「ケ」

ア）日常を「ケ」の日、祭礼や年中行事などを行う日を「ハレ」の日と呼ぶ、とする。

・「ハレ」（祭り）の日には、晴れ着で身支度し、餅や赤飯を食べ、お酒を飲んで祝い、特別な日であることを皆で共感する。

→関連用語：「晴れ晴れ」「晴れ着」「晴れ姿」など。気象用語は除外。

→弥生時代なら喪葬における喪主の隣の「歌舞飲酒」（三国志魏志倭人伝）。

・「ケ」は普段通りの生活を送る日。しかし、陰鬱な気持ちや何かよくない力、病気や死などによって「ケ」の生活が順調にいかなくなることを「気枯れ」＝「ケガレ」といって忌み嫌い、禊ぎ、清め（清浄な状態や境地を回復すること）、祓いなどをした。そのために「ケガレ」を落とし、単調になりがちな生活に「ケジメ」をつけて、「ハレ」の日を迎える。医学の発達が本当に支えになったか。

→禊（海や川の水で体の穢れを除去して浄める行為を指す）、斎戒（祭祀を前に心身を清め，禁忌を犯さないようにすること。心のけがれを清めることを斎といい，身のあやまちを禁じることを戒という）、沐浴（髪や体を洗い清める：井戸の水）、清め（清浄な状態や境地を回復すること）、祓い（罪や災いをとり除く行為を指す）

→朝日遺跡の井戸はBC2～1世紀の変革期以降に出現（伊勢湾岸域でも同じ）。沐浴のため、あるいは神へ捧げる水？大形建物に付随するのは一連の儀礼にとって不可欠だったから？

→支払いの「祓い」は同じ意味。ケガレをハラウための道具が御幣（ごへい）であり、貨幣の「幣」は負った負債（一種のケガレ）をハラウためのものを意味する。そう思わない借金好きの人は関係ないのだが・・・。例えば、英語のpay（支払う）はpacify（鎮める、なだめる）からきており、穢れた状態を脱して危険をなくすという意味がある。負債を清算することで自由になるということか。まさに、借金を返せば晴れ晴れしい気分になる・・・！

→「負債」による負い目という観念は、マルセル・モースの「贈与論」が重視する[贈る－受け取る－返礼する]という現物（アイテム）の遣り取りを超えた象徴レベルにおける社会的関係論の鍵である。「価値があるから交換されるのではなく、交換される（民族学でいう「マナ」（超越的な価値）が移る）からこそ価値がある」というのが贈与論の本質。そして、「マナ」は本来あるべきところに返さなければならない。」というのが循環の始まり。豊臣秀吉が下賜した呂宋壷の価値が、まさにそれ･･･？猫に小判の逆か！ただ、千利休はその限りではない？

イ）「ハレ」と「ケ」は一対。

・社会生活に「ハレ」と「ケ」があるように、各々の人の生活にも光と影がある。悪いことが起こると「明日はきっと良くなるはず」と期待し、かといって良いことが起きても「いいことばかり続かない」と戒める、といった自律的な生活（が送れる人）の規準となる。白／黒、明／暗、太陽／月（陽／陰）、凸／凹、男／女、善／悪、真／偽、文化／自然・・・。確かに2項区分は果てしないが、私たちの現実はグレーゾーンばかり。宗教的・科学的世界は中間項を排除する理想の追求であり、だからどうしても現実とずれる（現実の桎梏ともなる）。それは考古学も同様か？

・日常生活のうち仕事について言えば、日々の仕事はルーチンワークと呼ばれる。しかし、私などは同じ作業が続けられず、むしろそこからの逸脱も生じた。しかし、どこかでそれを戻す必要があり、

上司からの不時の叱責を契機とすればそれが《非日常》的な出来事となろうが、相変わらず繰り返すなら不面目な《日常》となる。それでもたまに褒められれば、嬉しい《非日常》的な出来事ではあるのだろうが。よって、慣れを避けて緊張感をもって仕事をするには、ルーチンワークの見直しも必要ということか。例えばP.D.C.A.。

→昨年度まで私の《日常》は会社に通う事、しかし休みは当然の権利で《日常》の一部であり《非日常》ではないし、研究会への参加も同様。今は自宅に居るのが《日常》だが、会社には行かないのでいささか《日常》が間のび。ただ、こうした場で話をするのはどちらの場合も《非日常》で、まさに「ハレ」の日と言える。嬉しい！と思いたいし、思わなければ不遜と思う今日この頃・・・。

→ルーチン：決まり切った手順、日常の仕事（同じ手順が繰り返されること）、あるいは精神統一（イチローや五郎丸）。

→自分（が属する集団）にとっての《日常と非日常》、他者（が属する集団）にとっての《日常と非日常》は同じ出来事の２面なら事はより複雑になる。

ウ）「ハレ」と「ケ」は時間的な区分として配置され、a：同じ場所（空間）で交代することもあれば、b：異なる場所（空間の区分）を必要とすることもある。

→ a：屋内・集落内、b：墓域内・祭儀空間。ただし、葬儀における服喪と歌舞飲食はa・bにまたがり、截然としたものではない。

・葬祭は《非日常》的事項であるが、人は不死ではないので後述する折り込み済みの《非日常》であるなら、大きくは《日常》の一つともいえる。

→かつての葬儀：自宅（時間の区分）

→現在の葬儀：葬儀会館（空間の区分）：《日常》の持続を期待

②社会にとっての《日常と非日常》

ア）「ハレ」と「ケ」の繰り返しも暦にそって予定通りの安定したリズムを刻むのであれば大きくは《日常》的と言える。

→よって、この場合に生じる《非日常》はより大きな出来事となる。

イ）自然環境の変化は、たとえそれが洪水であっても、ナイル川のように予定調和的に生活に折り込み済みであれば《日常》的な出来事の一つに過ぎない。しかし、それが全く予期せざる大災害となれば、社会生活に深刻な打撃を与える《非日常》的な出来事となる。

→朝日遺跡（五条川水系）では居住域を覆う洪水層は確認されていないが、より下流に位置するあま市阿弥陀寺遺跡、濃尾平野西部の稲沢市須ケ谷遺跡・野口北出遺跡（青木川・三宅川水系）、山中遺跡・八王子遺跡（日光川水系）では弥生中期以降の洪水層が認められる。よって朝日遺跡の《日常》に隣接河川の増水はあっても洪水は無いが、他の遺跡周辺では洪水が予想されて折り込み済みとなっていたであろう。

ウ）ヨーロッパや日本の中世（戦国）では戦いが頻発して《日常》的な環境となっていたために、かえって平和な期間が《非日常》的ともいえる状況があった。

→中国でも弥生時代に併行する戦国時代には諸侯の戦いが頻発する乱世であった。弥生時代には2世紀後半に「倭国大乱」（魏志倭人伝「其國本亦以男子爲王住七八十年倭國亂相攻伐歴年」）の時期があり、関東以西の「倭人」が戦いを繰り広げていた（田中 琢1991『倭人争乱』集英社）。倭（和）の国とはいえ、全てが合議で解決できたわけではない。

2.朝日遺跡の《日常と非日常》

①環濠（壕）と墓域

・環濠（壕）は自然環境の変化に合わせて定期的に掘削されるのでもなければ、ただ集団の結束力を高めるために掘削されたのでもない。そもそも洪水の発生は予知できず、環濠（壕）を掘削して万全を期すというようなものではないことは、低地の集落に環濠（壕）が常備された形跡のないことからもわかる。また、集団の結束力の高揚は環濠（壕）が掘削されたという事実からの類推であり、なぜ集団の結束力を高める必要があったのかを説明しなければ無意味な言説となる。

・環濠（壕）は掘削後ほどなく埋没するのが基本であり、再掘削の痕跡が無い環濠（壕）もあるので、むしろ環濠（壕）が廃れる、あるいは無いのが《日常》であり、環濠（壕）を掘削することには余程の事情があったと考える。その事情が土地をめぐる緊張関係であったことは想像に難く無い。あるいは九州から瀬戸内地域のように穴倉を環濠（壕）で囲むことをみれば収穫物や財産の保護といったこともあったろう。何も、直接の戦いに向けた構築物というよりは、緊張をはらんだ社会情勢が相互に環濠（壕）を掘削して誇示するという事態を招いた、チキンレースというわけではないが・・・。

・弥生前期には環濠（壕）を掘削することが常態（同心円拡張事例が典型）であり、それが弥生時代の始まりの風景であった。弥生中期は後葉（BC2〜1 世紀）を除き掘削と廃絶の繰り返し、後期は 1 回、もしくは 2 回掘削された。北部九州では弥生前期に熾烈な戦いが繰り広げられたとする指摘もあるが、伊勢湾岸域では弥生中期以降に〈戦い〉が行われたであろう。

・朝日遺跡では北環濠（壕）の南辺に BC4 世紀と BC2 世紀の 2 度「逆茂木」が設置された。枝分かれしたカシの幹が埋設されたもので、そのイメージは鹿角に通じる。実際の戦術的効果に加えて、視覚的､あるいはシカの象徴的な力を頼ったものかもしれない｡驚くのは鉄斧で伐採されていたことで、玉製作の縁で日本海側から入手した可能性が高い。

・環濠（壕）は内外の仕切りを物理的に明示した施設であり、内部の人々にとっては自らの関係を強固なものとして意識させる効果があった一方で、外部の人々にとっては易々とは入り難い異質な空間を意味したとすれば、弥生中期の朝日遺跡において「逆茂木」を巡らせた北区画と広大な南区画の関係は集落の構成員が二つに分けられていた以上のことを示している。つまり、超大形方形周溝墓の被葬者を核とする上層エリートは北区画に居住して集落全体を統率し、南区画の居住者（多様な出自・生産者を含む）は、彼らの《日常》に触れ合うこともなく、祭事や喪葬などの《非日常》的な場において彼らを垣間見ることができるだけであったかもしれない。その意味で、東墓域も中期後葉の〈中枢域〉のように南区画の居住者には二重の意味で《非日常》的な空間であったといえる。

②喪葬の風景

・死者の霊を安らかに他界に送ることは喪葬儀礼の役割であるが、そもそも霊が安らかな存在ではなく見境なく生者に祟ることを避けるための祭儀が古墳時代後期には行われたようだ。それはイザナギ・イザナミ神話につながる点であるが、果たして弥生時代はどうであったろう。

・弥生中期までは北部九州を除いた地域で豪華な副葬品は見当たらない。近畿や東海でも方形周溝墓に副葬品はほとんどない。朝日遺跡では中期前葉（BC4 世紀）に属す東墓域の中規模方形周溝墓の埋葬施設から一部割れた管玉を含む 14 点が散乱して出土した事例があるが、葬られたのは若年者（というより幼小児）と推測されるので、管玉の出土状況といい、かなりイレギュラーである。しかし、そうした葬られ方をする地位にあったとすれば、尊卑の区別は明確である。

・朝日遺跡では中期前葉（BC4 世紀）に最初の超大形方形周溝墓が造営された。周囲を比較的大きい方形周溝墓が取り囲むが、序列まではうかがえない。しかし、中期中葉（BC3 世紀）を経る中で後半には再び長辺 30m を超える超大形方形周溝墓が飛び地的に選地してその周囲を大・中・小が取り囲

む方形周溝墓の集塊状配列が鮮明になる。最初は大形墓そのものが特殊であったのが、大形墓を超えた超大形墓を核にして秩序だった配列を実現することが朝日遺跡では一つの形（普通のこと、《日常》的な風景）になったということであろう。しかもひたすら墓域は拡大する。とはいえ、それが中期後葉（BC2 世紀）へと継続しない点に社会的な《非日常》の出来が示されている。

③大形建物と井戸

・大形建物は竪穴建物なら縄文時代から存在するし、弥生時代の関東にも存在する。朝日遺跡では中期後葉（BC2 世紀）に谷 A 屈曲部の南斜面に井戸（臼転用 4 段組み）を、その南に上部構造は不明ながら大形掘立建物が配置される。大形建物周辺には炭化物が散乱して、最終的に焼失した可能性を窺わせている。先行する建物もあるので場所は固定されていたのであろう。これが〈中枢域〉、つまり祭儀空間の設置である。それ以前には北地区に設けられていたかもしれないが明らかではない。ともかく《日常》空間に隣接して《非日常》空間が常設されたことが明確になったわけで、両者の分離の固定化は新たなステージの構築を意味する。

④壺に描かれた双頭の鹿

・中期後葉（BC2 世紀）には 2 種の壺に鹿が描かれるようになる。一つは櫛描紋の壺に、もう一つは無紋の壺である。朝日遺跡で見つかった双頭の鹿は櫛描紋の施紋工程に組み込まれて体部が櫛描紋で覆われたために見えにくく、また頭の線描を修正したために双頭になっている。このことは、出来上がった鹿の線刻画を見せることよりも描くことに重点が置かれていたような印象を与える。つまり、このような特殊な土器の場合には、製作の場が通常の生産活動の場（《日常》）ではなく、祭儀（《非日常》）の場に移されていた可能性を窺わせる。果たして巫女が描いたのであろうか？

⑤玉と工房

中期前葉（BC4 世紀）に始まる朝日遺跡の玉作の技術的故地は日本海側地域である。玉の原材料はもとより溝切具や穿孔具（メノウ・安山岩）を含めて玉作に関係する材料と工具一式が工人によって持ち込まれた。最初は東墓域の谷 A 以北の通常の集落からは離れたところで管玉作りが大規模に操業され、その後に北区画の南西部に溝で囲まれた別区が設けられ、ヒスイ勾玉も製作されたようだ。中期中葉（BC3 世紀）には北区画内での生産も始まったようだが、玉作関連遺物が出土しているとはいえ南区画内での生産は工具が揃わず不確かである。玉作については普通の生産活動とは切り離されて北区画内においてより生産と生産物の一括管理が進み、よって横流しが防止されたと考えられる。管玉や勾玉は装身具であり、そのまま首飾りや腕飾、耳飾りなどとして、また装飾として衣服に縫い込まれたと考えるが、最終的には副葬されることもなく、個人の所有物であったのかどうかは不明である。おそらくは、儀礼にともない贈与物として交換され、人々の手を渡ることで社会的連携に資する品目であったと考える。